

# 三年が過ぎて

## ——広島芸術学研究会平成元年度活動報告——

八 田 典 子

このごろ世の中が新鮮だ。ビルの角が曲がった途端目の前に広がる一つの景色——初夏の日差しに照らされて忙しげに行き交う人々、車、まぶしい街路樹の緑……それらすべてがつくる一枚の「絵」に、私は興味深い視線を注ぐ。ただ一度のめぐり合わせ。それは「星座」の妙にも似て、かけがえない輝きを発している。

先日、東京国立博物館で「日本国宝展」を見た後、鎌倉を歩いた。新緑の葉陰に今なお濃い中世の面影を感じながら——。

一瞬の「時」、悠久の「時」。「時」はよく河の流れにたとえられるが、波立ちすばやく行き過ぎる表層の流れも、いつか、その深みに続く太くゆるやかな底流へと溶け込んでいくのだろうか。

広島芸術学研究会が生まれてはや三年の時が過ぎようとしている。会員の皆さんにとって、この三年間はどのような月日であっただろうか。

皆さんのお顔を思い浮かべつつ三年目の会の歩みを記す。  
会員は現在一二四名。大会および四回開かれた例会において、会員による研究発表七回、特別鑑賞会、パネルディスカッション、見学会各一

回が行われた。「広島芸術学研究会報」（以下「会報」と略す）は第九号から十二号までが発行された（二ページ増え六ページに。十二号ではさらに増え八ページとなった）。

以下、順を追って本会のこの一年の活動を振り返ってみたい。

### ▼平成元年七月二十二日（土）

午後二時から五時までエリザベト音楽大学五〇一号室で、第三回総会および大会が開催された。出席者は約七十名。会場では年報「藝術研究」第二号も配布された。

総会ではまず金田替代委員があいさつ。続いて来賓としてエリザベト音楽大学学長ホアキン・M・ベニテズ氏より、会の意義に触れたあたにかいごあいさつをいただいた。その後、議事に入り、昭和六十三年度事業報告ならびに決算報告が行われ、続いて平成元年度事業計画ならびに予算が決定された。次に、任期切れとなった役員（委員九名および会計監査二名）の改選についての審議があり、前任者はすべて再任され、

また、新たに四委員が選出された。さらに二年間、発足時の体制での充実を図るため、そして、事務局運営の一層の円滑化を目指しての再任、増員である。

引き続き開かれた大会では、樋口聡（広島大学・スポーツ美学）、岩田州夫（マツダ株式会社・デザイン）、伴谷晃二（エリザベト音楽大学・作曲）の三氏が研究発表を行った。樋口氏は「スポーツをめぐる美学的諸問題」と題して技術美としてのスポーツ運動の美とスポーツ実践者の美的体験について語り、岩田氏はカーデザインの分野から「市場の嗜好に対応したデザイン開発」と題し、スライドで数々の資料を示しながら色を中心とした時代や国による嗜好の違いを説明、伴谷氏は「創作過程に関する一考察―伴谷晃二作曲『はてしない風景、オーケストラのために』（1987）を中心に―」と題して実際にテープにより自作を披露しつつその創作過程を詳細に紹介した。分野の異なる会員との活発な質疑応答もあり、本研究会ならではの示唆に富んだ大会であった。

また、大会終了後、同大学ホール二階ロビーで開かれた懇親会には約四十名が出席し、歓談のひとときを過ごした。

#### ▼九月十五日（金）

「会報」第九号発行。掲載記事は、第三回大会での研究発表要旨のほか、「撫でる」（林立雄）、「三年目を迎えて」（金田晉）、「音信」（金田民夫）等。

#### ▼十月七日（土）

午後二時から四時三十分まで、比治山女子短期大学E棟一階階段教室

で第九回例会が開かれた。テーマは「器」。まず浜本桂三氏（比治山女子短期大学・美術）が「器の相」と題し、個性あふれる弁舌で器の多様な魅力を語った。その後、原田佳子氏（広島女学院大学・美術史）の司会で、浜本氏、川崎洋一氏（広島女子大学・デザイン）、花輪恒氏（デザイン総研広島・建築）が、「これからの器の文化」と題してパネルディスカッションを展開。会場の反応も含め、環境問題や現代人の価値観、民族性などにも触れる幅広い内容となった。出席者約六十名。

#### ▼十一月二十五日（土）

「会報」第十号発行。第九回例会でのパネルディスカッションの要旨のほか、「公共の色彩」（川崎洋一）、「〈評〉ワーキングスペース、アバカノウィッチ」（杉谷富代）、「〈キャッチ・ボール〉第一回（往）」（大井健地）等、掲載（〈評〉、〈キャッチ・ボール〉はこの号より始まったシリーズ記事）。

#### ▼十二月八日（金）

午後六時より八時まで、広島県立美術館講堂で第十回例会が開かれた。「絵・色・意識」をテーマに、松田弘氏（広島県立美術館・現代美術）が「南薫造を見直す」、金田晉氏が「美意識論の諸問題」と題し、研究発表を行った。出席者約四十名。広島県出身の洋画家南薫造の芸術的諸傾向の解明をスライドによる作品の紹介を交えながら試みた松田氏と、「美意識」という語の成立状況を古今東西の文献に当たり丹念に呈示してみせた金田氏の発表は、一見対照的ながら、ともに芸術、文化に接する際に欠かせぬ気概を感じさせた。

例会終了後会場を変えて年忘れの会が催された。参加者約三十名。引き続き論戦を展開する人あり、行く年に思いはせる人あり、楽しい師走の一宴であった。

▼平成二年二月二十六日(月)

「会報」第十一号発行。第十回例会での研究発表要旨のほか、「建築」とは、石と化した音楽である」(半田清||ペンネーム)、「〈評〉音量音痴」(才木幹夫)、「へキャッチ・ボール」第一回(復)」「(浜本一絵)等掲載。

▼三月十七日(土)

午後二時から広島市現代美術館にて第十一回例会が開かれた。テーマは「現代美術と広島」。まず地下一階のミュージアム・スタジオで南郷宏氏(広島市現代美術館・美術評論)が「美術批評の現在」と題し、自身の活動を交えながら現在進行形の美術批評の有り様を意欲的に語った。次に出原均氏(広島市現代美術館・現代美術)がスライドを使って当館で開催中の展覧会「公募 広島美術」を紹介。その後一同展覧会会場に移り実際に「公募 広島美術」を鑑賞した。この美術展は同美術館が広島市民を中心に行った第一回の公募展。広島市域美術界の現状の一面を示すものとして注目された。出席者は約八十名。

▼五月十五日(火)

「会報」第十二号発行。掲載記事は第十一回例会での発表要旨のほか、「まちは、昼と夜を演出する立体展示物」(小林正典)、「国際美術史学会に参加して」(斎藤稔)、「〈評〉美術評論の難易」(寺本泰輔)、

「へキャッチ・ボール」第二回(往)」「(中畝みのり)等。

▼六月二日(土)

午後五時から上田流和風堂にて第十二回例会が開かれた。テーマは「茶の湯の美意識」。堂内の庭や茶室「遠鐘」、「安閑亭」などを見学し、原田佳子氏の上田宗箇流茶道についての概説の後、上田宗嗣氏(上田宗箇流若宗匠)が「茶道についてのお話」と題し、茶の湯の美を創造する茶室、茶庭、茶道具、禅などについて語った。出席者は約七十名。一同お茶とお菓子をいただきながら神妙に拝聴。初夏の一夕、鮮やかな緑の中で日本文化の源流に触れる意義深い例会であった。

以上が本研究会の三年目の軌跡である。

静かに輝きを増していく人、彗星のように飛び去っていく人…。この三年間の数々のシーンをなつかしみながら、これからの日々を思いを新たに。さまざまな出会いを繰り返し、われわれの「星座」はどのような形を結んでいくことだろうか。より高次の輝きと調和を願って――。

(はった・のりこ 広島県民文化センター)